

## 類義動詞管見

——辞苑閑話・九——

工藤力男

### 恐怖のト・バ・タラ

前世紀の後半、中曽根内閣は、世紀末までに日本への留学生を十万人にする計画を発表した。それによって日本語教育界が活気づき、特に類義語の研究が活発化して様々の成果が世にでた。それは、日本語教師とよばれる人たちだけではなく、日本語学の研究者や、日本語に関心をもつ一般人からも注目された。

その早い成果は、柴田武らによる『ことばの意味』(1976 平凡社)であった。本書は、これを手始めに十六年ほどの間に3まで刊行された。森田良行『基礎日本語』(1977 角川小辞典)も、これと雁行するように十七年間に3まで出た。この二書は、共著と単著という違いのほかにも差が

あって補いあう書だといえる。前者は、取りあげた語数は少ないが、記述が平易なので、小学校の国語教科書の教材にも採用されたという。

わたしは日本語教育の経験は乏しいが、壮年期以来その周辺をさすらうことがあった。そこで耳にしたのが、教師間での「恐怖のト・バ・タラ」というつぶやきである。いずれも条件節を主節につなぐ接続助詞であるが、その使いわけの説明に窮することが多く、外国人からの質問がこわいというのである。なるほど難しい。日本人はそのことに気づかず用いているけれど、立ちどまって考えたら、誰しも迷うに違いない。その例を示してみよう。

そのホテルは、先の角を右へ①曲がると、②曲がれ

ば、③曲がつたら、《すぐですよ。

たかが日本語と思うのだが、意外に手ごわい。これを手際よく説明しおおせる人は多くはあるまい。とにかく盛んに議論されてきて、研究成果も膨大である。

厄介なことに、少し異質で悩ましい「なら」もある。その一例を、ちくま文庫『ケルトの薄明』からひく。

妖精の「どんな種族」にも「女王と道化」がおり、普通の妖精に触れられるなら治るが、女王か道化に触れられたら決して治らない。(p.195)

対照的な条件節なのに接続助詞が異なる。あえて変化を狙ったのだろうか。このような「なら」を加えて、「恐怖のト・バ・タラ、そして、ナラ」というべきだ、とわたしは考えている。近年の研究や解説はこれを加えて説かれるのが一般である。

次節から本題にはいるが、文字どおり細い管のすきまから見た類義動詞の幾組かについて問題を提起することが主目的で、決定的な解明をめざすものではない。

燃える・焼ける

日常よく使う二つの動詞であるが、その違いを説明する

のは意外に難しい。初めに標目の動詞の他動詞形「燃やす」「焼く」の用例を見る。

ミャンマーから逃れたバングラデシュの難民キャンプでくらすロヒンギャの子らに、ユニセフが自由にかかせたという絵が朝日新聞にのった(2017.11.2)。それに関する記者の説明に、「燃やされる家々」「少年は家を焼かれて逃げ」「家が焼かれる様子」がみえる。ここに「燃やす」と「焼く」を使いわけたのは何によるのだろうか。

十五年前の八月、広島原爆記念公園で折り鶴への放火事件があった。朝、火がでているのを通行人がみつけて通報したのだという。朝日新聞には、「折り鶴14万羽焼ける」の見出しの記事に「約14万羽の折り鶴が燃え、保管施設が焦げてガラスが割れるなどした。」とでた(2003.8.1夕刊)。記事は、現場をみているような記述であるのに対して、見出しは証言に距離をおいた表現である。

昨年十二月十七日、さいたま市大宮区で昼火事があった。その宵の七時、ラジオのニュースは、建物のどこそこが「激しく燃えている」と報じた。翌朝のラジオは「燃えている」のほか、終りに、外階段が「焼けている」もあった。どこそこは「外階段」だったのだ。産経新聞の

「燃え方が激しかった2・3階の焼け跡を中心に調べた」は、目撃証言を取りこんだ記述である。

かかる報道が難しいのは、昼火事は目撃者が多くて、報道文にその証言が干渉するからだろう。混同をさけるためには、この二語の基本的な語義をおさえておく必要がある。

「もえる」の基本義を簡潔に記述する『岩波国語辞典』は「①火になって炎が立つ」とし、『明鏡国語辞典』の「物に火がついて炎が上がる」、「ことばの意味」の「勢いよく炎があがる」もこれに近い。「炎」に着目したこれらの記述は、『新明解国語辞典』が用例にあげた「かげろうが―（＝ゆらゆらと立ちのぼる）」によって確かに支持されるだろう。

本稿執筆中の三月八日、日本経済新聞の山折哲雄「私の履歴書」⑧に、昭和廿年八月十日の花巻空襲を、「宮沢賢治の生家も友人たちの家も焼け落ちた」「なぜいっしょに燃えなかったのかと疑い」「花巻が燃えた日から」「花巻の燃えた日の記憶」とかいている。間近にみた炎の印象の強さが、「燃え」つづけるさまに着眼した表現を選ばせたのだろう。

一方の「やける」の語義記述は事情がかわる。『岩波国語辞典』が①の⑦に「火で燃える」とし、『明鏡国語辞典』も「火がついて燃える。また、燃えてなくなる。」とするのは、「焼ける⇓燃える」の循環記述である。

「やける」については、『新明解国語辞典』が「火などで強く熱せられた物が・変形（変質）して、元と違った状態になる。」とし、加えて「結果を問題にする言い方」と括弧書きする。この記述に注目し、この二動詞に「ている」を下接させると、次のようになる。

サンマが焼けている。⇓結果相

ゴミ箱が燃えている。⇓継続相

この二動詞は確かに類義語ではあるが、テイル形はアスペクトが異なり、「焼けている」は完了した結果に着目した表現、「燃えている」は継続する事態に注目した表現であることがわかる。ふつう「焼け跡」とはいうが、「燃え跡」とはいわないのは、そうした意味の違いが反映している。

火事を目撃者が報道機関に伝える際、まさに眼前にみた「燃えるさま」を語るはずである。それをきいた側が生々しさを伝えるために、直接「燃える」を用いてしまうことがあるだろう。正確な報道のためには、「燃える」「焼く

る」を区別する必要がある、とわたしは考える。

国立国語研究所『動詞の意味・用法の記述的研究』（秀英出版 1972）の「もす、もやす／やく／（くすべる）／こがす」の項の用例の傍線部は不審である。

まず「もやす」は、いちばん勢がいい。単に熱するだけでなく、対象をなくしてしまえばあいにかかわれる。

○手の冷たく成つた時などには彼はそこらの木を聚めて燃やす。（土・上 105）

この例文における動作の目的は、ひえた手を暖めることであって、木をなくすることではないのだから、適切な用例とはいえない。

右の記述にあるように、「燃やす」は対象の消滅が目的のばあいもあるので、例えば裏帳簿を処分するために「燃やし」、自治体がゴミを「燃える」「燃えない」に分別するのは理に適っている。

下りる・下がる

今、毎日の天気に関する情報は、ラジオ・テレビ・ネットと多彩かつ頻繁である。

わたしの日常生活では、昼食後の腹休めにテレビの前に坐ることが多い。異常気象の平常化が懸念される当今、TBS系の番組「ひるおび」では、気象予報士の森朗さんが様々な細工物を持ちこんで解説する。その細工物は素朴なので椿事が起りやすく、それに絡む恵俊彰キャスターとのやりとりがおもしろい。

昨年十月九日の月曜日、週の後半以降の天候について森さんは、秋雨前線が「おりる」と予想した。恵さんも復唱するように「おりる」と応じた。森さんはなお二回「おりる」といったが、恵さんの言葉は「下がる」であった。同月十二日の朝、その前線の動きについて、NHKテレビの名古屋からの放送では「前線が南へ下がって」が一度、「南下して」が二度きかれた。かかる動きを、森予報士はたいてい「下りる」という。

いつのころからか、この表現が気になっていた。廿歳まで秋田市で育ったわたしの気象に関する情報源はラジオであった。特に冬の気象について、シベリアからの寒気が近づくことに神経質になっていたのだろう。昔それをどう表現していたか定かではないが、脳裏には「冷たい空気が下りてくる」と記憶されたようである。ところが、近年はそ

れがきかなくなつた。

自分の記憶違いなのか、勝手な思いこみなのかしりた  
と思つて、気象関係の書物や古い新聞の気象情報を読みあ  
さつたが、らちが明かなかつた。最も多いのが漢語「南  
下」である。これは、他の気象現象たとえば梅雨前線など  
の「北上」と対で用いる便利さがあるらしい。次に多いの  
は、それを訓読みにした「南に下る」である。ごくまれに  
「おりる」がみえる。その一例を朝日新聞の気象欄からひ  
く。「真冬並みの寒気が大陸から日本海におりているので、  
北日本の日本海では雪が続いている。(時田正康)  
(1986.11.15 夕刊)

気象学者は日本語の表記法にさほど神経質だとは考えに  
くないので、多くみられる「南に下る」の読みの「くだる」  
さがる」の判定はかなり難しい。わたしがそう判断する材  
料の一つとして、倉嶋厚『日和見の事典』(東京堂出版  
1994)の一節をひこう。

高い山の頂で始まった紅葉は、平均すると一日に五〇  
メートルぐらいの割合で里に下りてきますが、実際に  
は周期的に吹いてくる寒波に対応して、一挙に二〇〇  
〜三〇〇メートル下がって、一休みして、また下がる

という段階的な変化をすることが多いようです。

(P.220)

小刻みな上下運動は、「階段を一段「上がる」下がる」と  
もいうが、五十メートル下降の「おりる」に対して、二三  
百メートルの下降を「下がる」というのはわたしの語感に  
あわない。だが、現実には断然これが多いのである。「登  
山客が三々五々下りてくる」、「紅葉前線が日に五十メー  
トル下りてくる」と同じように「冷気が下りてくる」でいい  
ではないか、と考えるのだが。

動詞の対義語は、例えば「貸す―借りる」「着る―脱ぐ」  
「売る―買う」のように、さほど複雑な関係を含むものは  
ない。が、右にみたような事態も出現する。上下関係の対  
義動詞は、「のぼる―くだる」「あがる―さがる」ときれい  
であるが、ほかに「おりる」「おちる」がある。つまり上  
向きは二語、下向きは四語で不均衡な対応なのである。

以上はわたしの直感にすぎないので、国立国語研究所  
『分類語彙表』(1964)をみると、[2154。上がり下がり]  
項の単純語は、上向きが「上がりる・上げル・のぼりる」、  
下向きが「下がりる・下げル・くだりる・くだしす・おり  
ル・おろしす・落ちル・落としす」、圧倒的に下向きの語

が多い（小字は平仮名が五段活用の語尾、片仮名が一段活用の語尾）。要するに二対四なのである。地球の引力の関係で不均衡になるのだろう。

気象関係者は気団の南下などを「下がる」という傾向があるが、それにはやむをえない背景がある。梅雨期の気象について、「前線が南へ下がる」がよくきかれる。この「下がる」はわたしの耳にも親しい。駅で電車が近づくと、黄色い線の内側に「下がれ」といわれ、交通の規制で「白線から下がる」ことが求められる。この「下がる」は「下降」ではなく、基準線からの「後退」を意味する。気象情報では、日本列島という基準線から南へ離れることが「下がる」である。気象関係者はそれを単なる移動と思うらしく、前線や気団が南下してくることも「下がる」という傾向があり、一般人はなおさらである。

気象情報の「寒気団が下がって来る」に接すると、寒気団が一本の綱のような形で下降するさまが思い浮かんで困るのである。『明鏡国語辞典』は「下がる」の語義を「①上部が固定され、他方が下に垂れる。」と記述している。

## ゆがむ・ひずむ

難しい類義動詞である。問題点の指摘だけに終わることを覚悟して書いてみる。

俳優の香川照之さんが歌舞伎役者の名跡をついで九代目市川中車をなおり、著書『市川中車 46歳の新参者』をだすと、TBSテレビは「ひるおび」でそれを取りあげた(2013.6.5)。スタジオのボードの一部を覆う貼紙がめくられると、「歪んだ道筋を正さなくてはならない。」とあった。冒頭の三字を齋藤哲也アナウンサーは「ひずんだ」とよんだ。文脈がなくては判断しにくいのが、わたしには小さな違和感があった。

その著書は口述筆記による小さな本で、「歪」字が四回出現する。初めにそれを掲げる。

1 父もいなければ母も仕事でいないという日常の中で私の家族の在り方は、ひどく歪んでいた。

(p.129)

2 生まれた家の負の連鎖を断ち切って、歪んだ道筋を正さなければならぬとも思ってきた。(p.137)

3 謙虚さは優しさを招き、傲慢さは負のパワーの歪み<sup>ひずみ</sup>を誘発する。(p.171)

4 現代では、(中略) 宗教の定義が歪み出してしまつた。(p.200)

振仮名のない「歪」は「ゆがむ」だとすると、アナウンサーのよみは違うことになる。もともと、本書の語の使用には不審な箇所があつて、振仮名の信憑性には注意が必要である。例えば、歌舞伎の家を「継ぐ」ことを、「普通に順当につなぐ」と書いた隣の行に「通常の継ぎ方」とある(p.146) ほか、「家をつなぐ」「家業をつないで」もみえる。

朝日新聞からえた材料で考える。パリで開かれたG20の財務相・中央銀行総裁会議を報ずる記事(2011.2.20)に、「世界経済の不均衡(ゆがみ)」とある。中国製冷凍ギョーザによる中毒事件に関する社説は「影落とす成長のゆがみ」と題し、文中に「社会のゆがみ」「(社会の)ゆがみをただす」とあるが、後段には「こんな中国の成長パターンは当然ひずみをはらむ。」がみえる。この使いわけの根拠はわからない。

記者のかく記事・文章では多く仮名書きされるが、依頼原稿はそれがなくて迷うことが多い。振仮名のある依頼原稿は読み易いが、その用法は微妙である。例えば、イーユン・リーの短編集『黄金の少年、エメラルドの少女』の書

評中の「一人つ子政策の歪み、人権問題、爆発的な経済成長と増大する社会的格差。」(小野正嗣 2012.9.16)があり、半田滋著『日本は戦争をするのか』の書評に、自衛隊幹部が著者に語った「勇ましいことをいう政治家やマスコミは、シビリアンコントロールの自覚をすっかり持つてもらいたい」をひいて、「この国の歪みを見る。」(保坂正康 2015.6.22)とある。

使いわけが難しいのでいろんな光景が出現する。岐阜県可児郡御嵩町は亜炭鉱跡にたつ住宅が多く、時々土地の陥没がおこる。毎日新聞のネット配信記事に、「玄関もゆがみ、一部の柱が2センチ以上浮き上がった」と「今回の沈下でまたひずんでいた」が行を並べていた(2013.12.22)。「個人的倫理と国家的倫理との背反と相互矛盾こそ、近代日本のひずみでありまたゆがみである。」(稲垣達郎編『森鷗外必携』学燈社 p.11)では、それが自覚的に併用されている。話し言葉の例では、NHKTVの「クローズアップ現代」で寺島実郎さんが、「成長率の鈍化で中国経済のゆがみやひずみ」と語ったことがある(2014.7.21)。

少し語誌をたどってみよう。「ゆがむ」は平安時代以来の語で、代表的な漢字は「𠂔」であった。室町時代には、

曲・邪・斜・狂なども用いられた。「ひづむ」は室町時代以後の用例しか見えない。『時代別国語大辞典室町時代編』の記述をかりると、自動詞の用例「愚鈍ニ心ノヒヅミ、ヒガミ、ユガミスズツタ者ヲ、東臯官爵ノ砥石ニノセテトギミガイテ」（玉塵抄五十）、他動詞の用例「夜モ昼モ己ヲ疲労サスル者ヲツカマヘント、タメツヒツメツ見レドモエヌゾ」（写本莊子抄二）がある。この二語は初めから意味が重なっていたようである。

この動詞の連用形名詞「ひづみ」が、音響用語・物理学などの専門語・*scientific* の訳語として厳密に用いられていることは周知の事実である。『科学大辞典』第二版によると、「物体に外力を加えたときに現れる形や体積の変化」が「ひづみ (strain)」なのだという。この定義に準じて、「外力が加わって、目に見えない程度に形が変わる」を「ひづむ」とする柴田武・山田進編『類語大辞典』（講談社 2002）によると、大半の用例は「ゆがむ」で覆われることになるだろう。

安倍公房『他人の顔』の終り近く、〈妻の手紙——〉の冒頭の第三文に、

私だって、あの最初の瞬間……あなたが磁場の歪みだ

などと言って、得意がっていた、あの瞬間から、すっかり見抜いてしまっていたのです。

とある。新潮文庫版では、若い読者のためにとして振仮名を多くつけており、この「歪」には「ひづみ」がある。『科学大辞典』の記述をふまえると、この読みは適切だと考える。

言語の記述において、文法や音韻と違って意味は規則化が難しく、適切か否かの基準がたてにくい。したがって個別の用例の判別は微妙である。

小学館編集部『使い方の分かる類語例解辞典』（小学館 2004）は「ひづみ」について、「社会のひづみを直す」「効率第一主義のひづみ」など、社会現象の中で生じてくる狂いについていうことも多い。」としている。この記述がわたしの語感に最も近い。

### 思う・考える

故郷の幼ともだちを懐かしみ、都会で一人ぐらしする娘を案ずる、そうした心の営みを、わたしたちは「思う」ともいう。寝すごして遅刻の理由を捻りだし、新しい研究の構想に腐心する、そうした心の営みを、わたしたちは「考

える」ともいう。その営みがどこでなされるか問われたら、「思う」は胸で、「考える」は頭でと答えるだろう。

今、動詞「おもう」を表記する常用漢字は「思」だけ、「かんがえる」のそれは「考」だけである。奈良時代、萬葉集の「おもふ」は、念・思・想・憶・意の五つの漢字で書かれた。「かんがふ」は奈良時代の文献に用例が確認できない。平安時代には漢字文献の訓読に見え、特に法律関係の用例が多い。その代表的な漢字「校・檢・考・勘」の意味は、何かと突きあわせたり比べたりして判断することらしい。その「何か」は、律令・格式など、易経の八卦前例・習慣などの規範であった。動詞は連用形を見出しに掲げる方針の『岩波古語辞典』が、「考へ」の成立を、「カムカへ」「カはアリカ・スミカのカ。所・点の意」と推定するのは興味ぶかい。ムカへは「ムキ合へ」にさかのぼるからである。

「思う」と「考える」は、このように意味が異なって紛れないはずだが、実際はそうではない。自分の日常の話し言葉でも、その使いわけはかなりでためて、硬い「考える」をさけて「思う」ですませがちである。書き言葉では、特に引用の〔と格〕をうけるとき、この二語は交錯し

やすい。その一例を、たまたまよんでいた雑誌論文からひく。

私は靖国神社に祀られるのはあくまで国難に殉じた戦没者であって、国難を招来したものであってはならないと思う。そういう意味でA級戦犯の合祀は、外圧の有無にかわりなく理解に苦しむところであり、速やかに是正されるべきものと考える。（「諸君！」

1987.2 p.204）

ここで動詞を使いわける根拠は微妙である。ひとつ段落に同じ語を使うまいとする文体意識によるのであろうか。大抵の人なら「思う」一つですますに違いない。

日本では『方法序説』『方法叙説』の名でしられるデカルトの著書の有名な命題“Cogito, ergo sum.”は、「我思う、ゆえに我あり」の訳が長く流通した。ラテン語によるこの命題は、フランス語の“Je pens, donc Je suis.”に続いて、対訳の形で出現するのだという。

パスカルの没後に遺った多くの断章を整理して刊行された“Pensees”は、日本では当初『冥想録』『瞑想録』の名で行われたが、今は『パンセ』が普通である。「パンセ」はまた、その書名の源である有名な箴言「人間は考える葦

である」の鍵言葉でもある。

このように、両書に共通するフランス語の動詞“*penser*”が、当初の邦訳で二様にわかれて出現したのはなぜだろう。

デカルトのこの書を最初に邦訳したのは落合太郎かと推測するものの、断定はできずにいる。どのみち、明治・大正期の学者なら、書名にも簡潔と威厳を盛ろうとして当然である。その方策は文語と音調であつたらう。

「われおもふ、ゆゑにわれあり」、「快い五七のリズムである。前半の“*Je pens*”の口語訳は「私がかんがえる」となって、五拍（わたくしは）／四拍（わたしは）と五拍（かんがえる）である。それを文語にかえて助詞を省いても、「われかんがふ」は六拍で、全く締まらない。そこで、仏和の訳語のずれに目をつむって五拍の「われおもふ」を選び、七拍の「ゆゑにわれあり」とで五七調に整えたのだ。わたしはそう推測している。

近年の『方法序説』の邦訳書では、「わたしは考える云々」が一般である。これには、語音の緊張感、リズムの快さは期待できない。

おわりに

類義語は他の語類、名詞・形容詞・副詞・接続詞等にも多いが、今回は四組の動詞に絞って考えた。そのうちの三組は、燃焼・上下・思考という漢字熟語に置きかえることができる。この同類は、委任・研磨・巡回・接触・増殖・探索・保持など多い。その中には、日本語の語義の違いを覆い隠している語もある。

熟語を成さない「ゆがむ・ひずむ」の同類には、「知る・わかる」「帰る・戻る」などがある。わたしたちは、漢字熟語の便利さに甘えて、日本語の奥義に鈍感になっていはいないか、そんなことを考えて本稿を草した。

(2018.5.10)